

今回の解説には「音からのイメージ」に言及している部分が多いが、これはあくまでも筆者の個人的な感覚によるものであり、読者の方々とは異なることもあるが、「こういう感じ方もあるな」という温かい目でご一読いただけるとありがたい。

幻想序曲《ロメオとジュリエット》 (チャイコフスキー)



P.I. チャイコフスキー(1840-1893)

チャイコフスキーが30歳になる直前に作曲した幻想序曲『ロメオとジュリエット』は、イギリスの劇作家シェイクスピアの戯曲を題材とした演奏会用序曲である。

プロコフィエフの同名バレエ音楽などとは異なり物語に沿った構成ではなく、楽想を自由に書き綴ったものである。チャイコフスキーの作品には、この他に『ハムレット』及び『テンペスト』という2曲の

幻想序曲があるが、いずれもシェイクスピアの戯曲を題材としている。この曲の特徴は、序奏及び終結部を伴ったソナタ形式で構成されている。

(1) 序奏

クラリネットとファゴットにより序奏主題が演奏される。これは一般的には「ローレンス僧の主題」と言われているようで、正義感を示していると言えよう。続いて弦楽器が、物語の舞台となっているイタリア北部ヴェローナの不安に満ちた様子を演奏する。続いて現れるハープのアルペジオが夜明けを表している。広場にモンタギュー家とキャピュレット家の面々(以下「両家」という)が登場してくる。チェロによって演奏される音形は、先ほどの序奏主題の反進行となっており、両家が、正義とは反対の「対立」関係にあることを意味している。

両家が睨み合いによって気持ちを高ぶらせる様子を、木管楽器と弦楽器が同音で掛け合いし、さらにテンポを徐々に速くすることで表現すると、曲は提示部に入る。

(2) 提示部

第1主題は、「両家の対立抗争」を題材としている。途中、弦楽器と木管楽器が同じ音形を2拍ずらして演奏するが、これは

PROGRAM NOTES

両家の主張がかみ合わないことを見事に表している。ついには決闘となり、管打楽器による不規則な打音が、剣が交わる激しい抗争を表現している。そこにヴェローナ大公が登場することで争いはいったん収まり、広場には静けさが戻る。

第2主題は一転して優麗な旋律である。これは「ああ、ロメオ、ロメオ! どうしてあなたはロメオなの?」でおなじみのバルコニーシーンを題材としている。そんな美しい旋律に心地よく耳を傾けていると、両家の争いに引き戻されるがごとく、曲は展開部へと進む。

(3) 展開部

この展開部を原作のストーリーに照らし合わせると(筆者の個人的な解釈であるが)、ヴェローナの広場で両家が遭遇すると、小競り合いが始まる。そして、キャピュレット家のタイボルトがロメオの友人であるマールキュシオを刺してしまう。逆上したロメオが今度はタイボルトを刺殺してしまう(提示部の決闘シーンの再現)という場面である。

(4) 再現部

決闘シーンの再現に続いて曲は再現部となる。第1主題及び第2主題を再現した後、チェロが第2主題のモチーフを奏でるがこれは、ローレンス僧の画策を表してい

る。その画策とは「ジュリエットが42時間仮死状態となる魔法の薬を服用し、埋葬されたのち、目覚めたところに駆け付けたロメオと駆け落ちする」というものである。

ジュリエットがロメオを思いながら仮死状態になっている(第2主題の再現)と、ロメオが駆け付ける(第1主題の再現)。ロメオはローレンスの画策を知らなかったため、動揺し(1拍ずつのアクセント)自殺する(シンバル、管楽器及び弦楽器による鋭い打音)。そして目覚めたジュリエットは傍らに息絶えているロメオを発見し、ロメオが持っている剣で自分を刺してしまう(ティンパニーの激しいロール)。

(5) 終結部

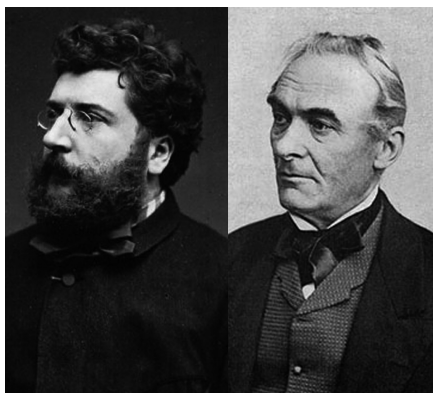
ティンパニーが打つ運命の動機に導かれて、両家の重々しい悲しみを表すと、木管楽器が序奏主題を奏でる。ここでは、両家に対してヴェローナ大公が「これ皆、憎悪の懲罰だ。罰に漏れた者はいない!」とのお言葉を発している場面で、これにより、やっと両家が和解する。すると、若い二人は浄化される。

この浄化をハープが奏でる上昇するアルペジオで表現し、天国で二人の愛が強く結ばれる様子をH(ドイツ語表記:「シ」の音)の強奏で表現してこの幻想序曲を締めくくる。

なお、チャイコフスキーの作品には、魔法をかけられて白鳥の姿になったオデットが、その魔法をかけたロットバルトを倒したジークフリート王子と、強く結ばれるというバレエがあるが、その『白鳥の湖』の最後の音と、この『ロメオとジュリエット』の最後の音は、音程が同じである。

《カルメン》組曲より (ビゼー)

歌劇『カルメン』は、フランスの作家メリメが残した小説『カルメン』を基にした全4幕のオペラである。



左：作曲家 G. ビゼー(1838-1875)
右：小説家 P.メリメ(1803-1870)

主な登場人物は次の4人である。

- カルメン：
たばこ工場で働く妖艶なジプシー娘
(メゾソプラノ)
- ドン・ホセ：
身分は衛兵、職位は伍長(テノール)

- エスカミーリオ：
闘牛士(原作ではリュカスという名、
バリトン)
- ミカエラ：いいなづけ
ドン・ホセの許嫁(原作には登場しない、
ソプラノ)

オペラのストーリーは次のとおり。

[第1幕]

舞台はセビリア。たばこ工場から出てきた女工たちの中にカルメンがいる。カルメンは、彼女を出待ちしていた男性たちに言い寄られるが、興味がない様子。

衛兵交代で職務に就いたドン・ホセのもとに、ミカエラが故郷からやってくる。再会を喜んだホセは、母からの手紙を読み、ミカエラと結婚することを決心する。広場に女工たちが戻ってくると喧嘩が始まり、辺りは騒然となる。加害者として逮捕されたカルメンは、ホセを誘惑する。すっかり惚れ込んでしまったホセは、護送中にカルメンの“お縄”を解き、逃がしてしまう。

[第2幕]

酒場では、カルメンたちジプシーの娘が踊りに酔いしれている。そこへ、エスカミーリオが英雄気取りで登場する。その雄姿にカルメンは心を奪われた。エスカミーリオも同様であった。

エスカミーリオが去った後、ホセが現れる。カルメンは「愛しているなら、自由がある山（密輸団のアジト）へ一緒に行こう」と誘う。ホセは、最初は断るが、上司（衛兵隊長）とのいさかいから、結局は密輸団の一味となってしまう。

〔第3幕〕

山のアジトではホセが、密輸団の仲間たちが見回りのために外出している留守を警備している。そこにミカエラがやってくる。

なんとか更生してほしいとミカエラが懇願しても、ホセは聞く耳を持たない。

そこへカルメンを探してエスカミーリオが現れる。ホセは、エスカミーリオもカルメンを愛していることを知り、戻ってきたカルメンを問いただすが、すでにカルメンのホセへの気持ちは冷めていた。

〔第4幕〕

闘牛場では群衆がエスカミーリオを大歓声で迎えている。彼はカルメンと愛を語り合う。皆が闘牛場に入場すると、ひとり残ったカルメンのもとに、人ごみに隠れていたホセが歩み寄る。

復縁を迫るホセに対してカルメンは「生きようが死のうが、あんたの言いなりにはならない!」と突っぱねる。逆上したホセが、カルメンをナイフで刺殺して

しまう・・・という、後味の悪い内容である。

本日は、そのオペラから、オーストリアの音楽学者ホフマンが演奏会用に編纂した2つの組曲から抜粋して演奏する。

なお、国分寺フィルハーモニー管弦楽団では、オペラやバレエの組曲を演奏する際、ストーリー順に並べなおしてプログラムを組むことが多いが、本日は、組曲の順番で演奏する。

第1曲 プレリユードとアラゴネーゼ

曲は2つの部分に分かれている。前半（プレリユード）は、第1幕への前奏曲で、オペラでは本日の第3曲としてお届けするトレアドールに続いて演奏される。後半（アラゴネーゼ）は第4幕への前奏曲である。

第2曲 間奏曲

ハープの分散和音に導かれたフルートの旋律が美しい曲で、オペラでは第3幕への前奏曲という位置づけとなっている。

第3曲 トレアドール（闘牛士）

「カルメンといえばこの曲!」というくらい有名であり、テレビ番組のBGMにも使用されるほど認知度が高い曲である。オペラでは、導入曲という位置づけで、一番初めに演奏される曲である。

第4曲 ハバネラ

カルメンが、出待ちの男性たちに「あたしは、愛してくれない人を好きになる」と自分の魅力を誇示し、普通の男性には興味のない様子を歌う場面である。一般的に、カルメンがホセを誘惑するのはこの曲と思われがちだが、実際には第1組曲第3曲のセギディーリアがそれにあたる。

第5曲 夜想曲

ミカエラが密輸団のアジトを訪れて、「自分の愛しい人を転落させた女と、堂々と話ができるよう、主よ、お守りください」と歌うアリアである。

第6曲 闘牛士の歌

エスカミーリオが酒場を訪れ、「闘牛場は勇者のお祭りだ!」と自分の英雄っぷりを誇示するアリアである。

第7曲 ジプシーの踊り

酒場で、ジプシー娘たちが酔いしれるジプシーの踊りである。曲の初めの哀愁を帯びたメロディーと和声展開は、子供のころにNHK「みんなのうた」で、泣きながら聴いた「小さな木の実」にどこことなく似ている。その後、徐々に情熱を増していき、この組曲を締めくくる。

交響曲第7番 嬰ハ短調《青春》作品131 (プロコフィエフ)

この作品には当初、標題が付されていないかったが、作曲者自身が「ソヴィエトの青年たちの前途の喜び」という思想によってこの作品を書いた」と語っていることから、『青春』という標題で呼ばれるようになったそうである。



S. S. プロコフィエフ(1891-1953)

“わかりやすく、単純な曲”をモットーに作曲が進められた。実際、交響曲第5番やバレエ音楽『ロメオとジュリエット』においては、オクターブよりも広い音程で跳躍する旋律が多いが、この曲では、そのような劇的な旋律よりも、甘美な旋律を多用している。

第1楽章 Moderato 嬰ハ短調 4分の4拍子

序奏は無く、ホルン、チューバ、ピアノ等による嬰ハ(ドのシャープ)のオルガントーンが

示されると、第1 ヴァイオリンが第1 主題を奏でる。クラリネットが復唱すると第2 主題に移行する。

この第2 主題は、朝日に照らされたさざ波を表すようなヴァイオリンのリズムを従えてヴィオラ、チェロ、ホルン等が朗々と歌い上げる。その「昭和的」な旋律に筆者は「瀬戸内の夜明け」を想像してしまう。

この主題が2度繰り返されたあと、小鳥のさえずりのような第3 主題的な部分(実際には提示部の終結部分)のあと、展開部に入る。チェロとコントラバスによる第3 主題的なモチーフで始まり、盛り上がりした後、フルートが再び先ほどのモチーフを奏でると、再現部に入る。ここは、基本的に提示部を再現しているが、小節をカットしたりするなど、提示部とは色を少し変えている。

終結部では、第1 主題のモチーフをヴァイオリン、オーボエ、ヴィオラ、コーラルングレにより輪唱して第1 楽章を締めくくる。

第2 楽章 Allegretto へ長調 4分の3拍子

ワルツ風の楽章である。基本的には4小節で1フレーズという「わかりやすい」ものであるが、ファゴットのソロに続く中間部では、4小節+4小節+1小節というような不規則なフレーズも現れる。終結部に入ると徐々に

にテンポを上げて盛大に締めくくる。

第3 楽章 Andante espressivo 変イ長調 4分の4拍子

間奏曲風な楽章である。チェロが抒情的な旋律を受け持つ。中間部のオーボエの旋律は、プロコフィエフらしく親しみやすく、印象的な音の動きでありながら、この曲の解説の冒頭で申し上げたとおり、離れて跳躍する音はなく、5つの連続した音程しか使われていない。

第4 楽章 Vivace 変二長調 4分の2拍子

一転して速く、快活な Rond 風の楽章となる。主題は、登場するたびに、調性や音形を少しずつ変えており、次の登場の時はどんな表情なのだろうか、と聴いている方々をワクワクさせる(ことができるように頑張って練習いたしました!(^^)!)。

第1 楽章の第2 主題(そう、あの「瀬戸内の夜明け」)が荘厳に再現されると、曲は終結部に入り、テンポを落としながら静かに締めくくる。

なお、初演の指揮者のアドヴァイスにより、続けて、本楽章の主題を用いて華々しく完結するように23小節が付加されたヴァージョンもある。本日は、この追加版で演奏する。